

# 大腿骨近位部転移性骨腫瘍に対する 手術治療成績の検討

柿崎 寛 近江洋嗣 秋元博之 大鹿周佐

IRYO Vol. 64 No. 5 (328-332) 2010

## 要 旨

われわれは大腿骨近位部転移性骨腫瘍の切迫骨折および病的骨折に対して積極的に手術を施行しており、その術後成績について検討した。症例は平成元年4月から平成21年3月までにNHO弘前病院整形外科で手術を施行した37例40肢で、そのうち病的骨折は19肢であり、切迫骨折は21肢だった。術後成績を鈴木の下肢機能評価および鎮痛効果の評価で評価し、病的骨折群と切迫骨折群とで比較検討した。手術方法は腫瘍切除+人工骨頭置換術が26肢、腫瘍切除+大腿骨再建術が7肢、骨接合術が5肢、人工大腿骨全置換術が2肢だった。鎮痛効果は、両群に有意差はなかった。術後歩行不能だったのは病的骨折群で有意に多かった。終末期のADL温存のためには病的骨折を生じる前の切迫骨折の時点での早期発見と積極的な手術治療が重要と考えられた。

キーワード 転移性骨腫瘍, 大腿骨近位部, 病的骨折, 切迫骨折, 手術的治療

## はじめに

大腿骨近位部の転移性骨腫瘍は転移性脊椎腫瘍に次いでよくみられるもので、この部分でひとたび病的骨折を生じれば患者の残された生存期間でのQOLを大きく障害することが多い。したがってこの部位に転移性腫瘍が発見されたなら、骨折をすでおこしている場合は勿論、骨折が差し迫っているときにも適切な整形外科的な介入が必要となる。治療法としてどのような方法を行うべきか、姑息的な方法で済ませてもよいか、あるいは根治的な手術をしたほうがよりよいのか、個々の症例の背景を考慮

して最善の方法で対処しなければならない。

今回われわれは、大腿骨近位部の転移性骨腫瘍の症例について、治療効果を生命予後、鎮痛、歩行能力の観点から検討したので報告する。

## 対 象

平成元年4月から平成21年3月までの20年間にNHO弘前病院整形外科で手術的治療を行った大腿骨近位部転移性骨腫瘍は37症例40肢であった。男性が18例、女性が19例であった。手術時年齢は30歳から88歳まで、平均61.8歳であった。最終経過観察時

国立病院機構弘前病院 整形外科

別刷請求先：柿崎 寛 国立病院機構弘前病院 整形外科 〒036-8545 弘前市大字富野町一番地  
(平成21年10月28日受付, 平成22年3月12日受理)

Clinical Results of the Surgical Treatment for Metastatic Tumor of the Proximal Femur

Hiroshi Kakizaki, Hirotugu Omi, Hiroyuki Akimoto and Shusa Ohshika, NHO Hirosaki National Hospital

Key Words: metastatic bone tumor, proximal femur, pathologic fracture, impending fracture, surgical treatment